

こども学科：ダイバーシティ・インクルージョンの実現を目指して



- ・子どもは、一人ひとりかけがえのない生命として、生まれてくる。(生命への固有の権利)
- ・子どもは、生きて育つ。(生存と発達の確保=教育と福祉の権利の統一的保障)
- ・早く育つ子もいれば、ゆっくりゆっくり育つ子もいる。(障害)
- ・何か一つのことにとこだわり集中できる子もいれば、広く取り組むことのできる子もいる。(障害)
- ・病気と闘いながら日々を過ごしている子どももいる。(病弱)
- ・さまざまな国にルーツを持つ子どももいれば、ルーツを持たない子どももいる。(国籍)
- ・お陽さまにいっぱい照らされて育つ子もいれば、雲低く雪がたくさん降る中で育つ子もいる。(自然)
- ・海と暮らす子もいれば、山と暮らす子もいる。(自然)
- ・さまざまな地域で異なることばを身につけて育つ子どももいる。(ことば)
- ・大きなお屋敷に住む子もいれば、家族みんなで一つの部屋に住む子もいる。定まったお家を持たない子もいる。(貧困)
- ・家族と笑いあってご飯を食べる子どももいれば、今度いつご飯を食べることができかわからない子どももいる。(貧困)
- ・叱られてばかりだったり、いつ叩かれるかわからず怯えてばかりいる子どももいる。(虐待)

子どもは、どのような環境におかれるかによって、さまざまに育つ。

- ・子どもは、さまざまなおとなと出会うとともにさまざまな子どもと出会い、影響を及ぼしあう。
- ・さまざまな子ども、そしておとながかかわりあい、共感し、発達していく。
- ・子どもは、生まれたときから、自分で生きる。息を吸う。母乳を求める。不快だと泣く。自分を表現している。
- ・そばにいる人が、子どもの表現に応答する。
- ・応答関係の中で、子どもは自分のやり方を見つけていく。
- ・子どもは、喜び・怒り・哀しみ・楽しさをことばだけでなく、身振り手振り身体全体で表す。楽器を使って、声を出して表現する。描いたり造ったり壊したりして表現する。(表現系)
- ・子どもにかかわるおとなは、子どもを知ることが大切。おとなになるプロセスの中で、子どもだった頃のあれこれを忘れてしまうことが多いから。
- ・子どもを育てるおとなは、子どものあれこれに詳しく、子どもへの向きあうことに慣れている人に手伝ってもらおうと楽になる。最初は、かなりの部分を手伝ってもらうが、やがて子どもを育てるおとな自身、いろいろなことがわかってきて、やれるようになる。(支援系)
- ・子ども自身がその持ち味を発揮できるように、子ども自身の好みや可能性に合わせて働きかけることもおとなの役割。
- ・子どもを育てるおとなが安心して育てられるように働きかけるのも専門的なおとなの役割。(教育系)

そうして子どもは、自分のおかれた条件の中で自分のやり方で育つ。(自己決定)

保育者は、一人ひとりの子どものちがいを知り、認め、対話の中で、伴奏者となる。

NFU こども学科は、このような保育者を育む。

(遠藤由美.社会的養護・教育福祉の観点から)